

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02036

研究課題名(和文)「溥儀文書」の構築と研究

研究課題名(英文)An Assemblage and Study of Puyi-related Archives

研究代表者

ボルジギン 呼斯勒(Borjigin, Husel)

昭和女子大学・国際学部・教授

研究者番号：40600193

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国、台湾、ロシア、日本の諸文書館に所蔵されている、溥儀関係の文書を収集し、「溥儀文書」の輪郭とその規模を浮かび上がらせることができた。研究代表者が、関係諸国の公文書館に所蔵される膨大な史料を精査し、新たに発見された資料に基づいて、溥儀の年譜の不明部分をうめた。その上で、本研究は中国による領土の維持、「辺境」民族の自立を求める運動、植民地の開拓(日本)、極東地域の勢力を均衡させようとする大国(ソ連)の思惑の相互作用のコンテキストの中で、溥儀の生涯と満洲国史、さらには北東アジア史を新たに考察し、溥儀のモンゴル人との政略結婚やそのシベリア抑留、東京裁判への出廷等の出来事を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

満洲は20世紀前半、さまざまな勢力による緊張をはらんだ場所であった。溥儀はその頂点に立つシンボルである。「溥儀文書」から、満洲国史、さらに北東アジア史を再構成することによって、新たな成果がうまれるはずだと信ずる。極めて必要性が高いにもかかわらず、いまだ、中国でも日本でも展開されていないこの研究には国際的にも熱い視線が注がれるであろう。本研究は、植民地研究に新たな視点を提供しうると同時に、日中露関係史の理解にも有益だと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to reconstruct Pu Yi-related archives through the collection of relevant records owned by archives offices in China, Taiwan, Russia, and Japan. The Principal Researcher and Co-Investigator, among the objects of this study, minutely examined historical materials from archives in the countries concerned, and based on recently found materials, have determined previously unknown aspects of Pu Yi's chronology. Pertinent contextual elements of this research include the territories maintained by China, independence movements by frontier ethnic groups, the planting of colonies by Japan, and the role of the Soviet Union and The United States in the balance of power in the international environment of the Far East. Other reconsidered events and circumstances during Pu Yi's lifetime include the histories of Manchukuo and Northeast Asia, a clarification of Pu Yi's political marriage with Mongolia, the Siberia detentions, and the Tokyo War Crimes Tribunal.

研究分野：地域研究

キーワード：溥儀 満洲国 モンゴル 東アジア国際関係 ロシア公文書館 中国公文書館 台湾公文書館 日本公文書館

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

清朝、中華民国、満洲国、シベリア抑留、中華人民共和国といった時代を経験した最も重要な人物溥儀については、これまで単なる「ラストエンペラー」、「悲劇の皇帝」として理解されてきた。従来の伝統的で、型通りの「溥儀研究」は結論が最初に置かれるために、研究はそこで行き止まり、それ以上の発展はあまりない。溥儀研究の限界は、次の2点による。第1に、異なる勢力と妥協せざるをえなかった、異なる時代をいきた溥儀にかかわる資料は、中国、日本、ロシア、台湾のいずれにとっても、デリケートな性格をもち、タブーに近いものになっており、ほとんど利用されていない。第2に、いわゆる清朝の最後の皇帝という「封建性」と満洲国皇帝という「傀儡性」によって、ほとんどの研究者の立場は大国の利害の観点から溥儀を見るにとどまるからである。

研究開始当初は、さまざまな視点から溥儀の生涯とその時代をより深く掘り下げることによって、溥儀に対する新たな認識が開かれるようになっていた。しかし、中国における溥儀研究は、「封建代表」「傀儡皇帝」に対する批判と「改造」された「公民」溥儀に対する称賛という二つの構図からぬけだせない。すなわち、清朝のおおくの遺産を「継承」した中国は、最期をむかえた、清末政府のいわゆる「弱体無能」や「封建性」「腐敗性」、および「張勳復辟」に応じた溥儀、日本との協力、とりわけ満洲国の皇帝となった溥儀を批判する一方、中華人民共和国により「改造」された「公民」溥儀は、かえって、たたえられているのである。

日本は当事国にもかかわらず、長い間、溥儀に関する研究は主にその伝記の整理にとどまり、溥儀なりの主体性と当時の社会状況への注目もある程度取り組んでいるが、深く掘り下げられてはいない。

研究代表者は、ハルハ河・ノモンハン戦争と日本人のモンゴル抑留についての研究(ボルジギン・フスレ『日本人のモンゴル抑留とその背景』三元社、2017年。同『モンゴル・ロシア・中国の新史料から読み解くハルハ河・ノモンハン戦争』三元社、2020年)をすすめるなかで、中国第一歴史档案馆や溥儀研究院、国立ロシア連邦文書館、国史館など中国、ロシア、台湾の諸文書館、博物館に所蔵されている、これまであまり知られていない、溥儀に関する極秘資料の所在をあきらかにし、同研究に着手しはじめた。

### 2. 研究の目的

本研究では、中国、台湾、ロシア、日本、モンゴルの諸文書館に所蔵されている、これまで利用されてこなかった溥儀関係の文書を収集し、「溥儀文書」を再構築するうえで、中華帝国の領土の維持と「辺境」民族の自立をもとめる運動(満洲人・モンゴル人)、植民地開拓(日本)、極東地域の勢力を均衡させようとする大国(ソ連)の相互作用のコンテキストのなかで、溥儀の生涯と満洲国史、さらに北東アジア史をあらたに考察することを目的とした。本研究は、膨大な断絶された史料を一つの展望のもとに生産的に統合し、溥儀を単なる傀儡皇帝ではなく、近代以降、清朝・中国の長期にわたる変化のなかの代表的人物としてとらえ、その全体像を解き明かし、20世紀前半の北東アジアの秩序の形成と維持という観点から、日本、満洲国、中国、旧ソ連(ロシア)、アメリカの役割をよみなおそうとするものである。

満洲は20世紀前半、さまざまな勢力による緊張をはらんだ場所であった。溥儀はその頂点に立つシンボルである。「溥儀文書」から、満洲国史、さらに北東アジア史を再構成することによって、新たな成果がうまれるはずだと信ずる。極めて必要性が高いにもかかわらず、いまだ、中国でも日本でも展開されていないこの研究には国際的にも熱い視線が注がれるであろう。

### 3. 研究の方法

本研究において中核をなすものは、多分野にわたる豊かな経験を有する専門家の協力のもとでの、中国、台湾、ロシア、日本、モンゴルの溥儀関係の文書の徹底的な収集と分析である。

研究代表者と連携研究者が研究目的にそって、関係諸国の公文書館に所蔵される史料を精査し、新たに発見された資料にもとづいて溥儀とかかわる出来事やその年譜の不明部分をうめ、溥儀文書の全体像を明らかにした。

溥儀は異なる時代、異なる勢力と関係を持っていたため、溥儀に関する文書はそれぞれの国の公文書館に所蔵されている。宣統帝(1908~1912年)としての溥儀の資料は主に北京の中国第一歴史档案馆(文書館、以下同)に所蔵されている。同档案馆には「溥儀档案」という項目を設けられており、「小朝廷」(1912~1924年)の資料を中心に、溥儀の「天津時代」(1924~1931年)の資料も加え、約41万1958件の資料が所蔵されている。台湾の国史館には宣統皇帝、「小朝廷」と関わる資料が所蔵されている。溥儀の満洲国皇帝(1932~1945年)としての資料は、南京の中国第二歴史档案馆や長春の吉林省档案馆、偽滿皇宮博物院、溥儀研究院、遼寧省档案馆のほか、台湾の中央研究院近代史研究所档案馆、国史館も一部を所蔵している。溥儀のシベリア抑留(1945~1950年)の一次資料はロシアの国立ロシア連邦文書館や社会政治史文書館、对外政策文書館などの文書館に所蔵されている。台湾の中央研究院近代史研究所档案馆と国史館には、第二次世界大戦後の溥儀の行方、その財産を追う中国国民党の軍や諜報部門の資料、東京裁判や溥儀の送還をめぐる中華民国政府とソ連、アメリカの交渉の資料が残されている。北京の中国外交部档案馆には、1950年の溥儀の送還に関する中ソ関係の資料、中央档案馆、偽滿皇宮博物院には溥儀が撫順戦犯管理所にいた時(1950~1959年)の資料が所蔵されている。日本の外務省外交史料館などには、上記各時代の溥儀とかかわった日本政府や軍部などの資料が収録されてい

る。

#### 4. 研究成果

本研究は、「溥儀文書」を中国、台湾、ロシア、日本、モンゴルの諸文書館、博物館などで収集することができ、「溥儀文書」の輪郭と規模を浮かび上がせることができた。とりわけロシアでの調査では、予想をこえた重要な史料を発見し、収集することができた。本研究成果の一部は「溥儀の財宝 150 点の写真」「最後の皇帝 悲哀の輝き」というタイトルの記事で、『読売新聞』（2018年3月20日）により報道された。

これまで、溥儀とダゲール・モンゴル人ゴブロ・婉容（1906～1946年）、Erkhet モンゴル人文綉（1909～1953年）の結婚について、いずれも「偶然」の出来事として認識されてきた。本研究によれば、清朝を復興するには、さまざまな勢力の支持を得る必要があると認識した溥儀は頻繁に、清朝の旧臣やモンゴルの王公と交流するようになった。溥儀と婉容、文綉との結婚は、偶然の出来事ではなく、大清王朝とモンゴル貴族の通婚の継続であり、戦略的な目的を持っていたことを明らかにした。地理的に、満洲国の領土の約半分はモンゴル人が居住する地域（内モンゴル東部とフルンポイル）により構成されていたこと、満洲国時代、行政・軍事・法律・宗教などにおいて、満洲人とモンゴル人は黙契を交わしており、モンゴル人は高度の自治をも享受していたこと、満洲国の成立とその維持において、興安4省（のちの興安総省）というモンゴル地域・モンゴル人の存在が重要であったことを、指摘した。

「凌陞事件」および「ノモンハン事件（ハルハ河・ノモンハン戦争）」における日本・満洲国軍の敗北は、溥儀に大きな打撃を与えたと指摘した。

本研究は、また、溥儀におけるシベリア抑留は、ソ連・日本・中国・アメリカといった大国の角逐の結果であり、極東国際軍事裁判は、大国の極東地域をめぐる角逐、対話の代表的舞台となり、溥儀の出廷は、こうした大国の角逐の縮図であった、さらに大国に操られ、翻弄されながらも、溥儀はその激動の時代を生きたのであると結論づけている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 呼斯勒	4. 巻 1
2. 論文標題 俄国所蔵溥儀档案簡介	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 第七屆溥儀及其時代國際學術研討會文集	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ボルジギン・フスレ	4. 巻 925
2. 論文標題 溥儀文書の基礎的研究 シベリア抑留時代の文献を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 334-362
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ボルジギン・フスレ	4. 巻 943
2. 論文標題 写真・映像に見るハルハ河・ノモンハン戦争	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 24-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ボルジギン・フスレ	4. 巻 955
2. 論文標題 溥儀のシベリア抑留に関する再検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 11-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 ボルジギン・フスレ
2. 発表標題 溥儀のモンゴル人との通婚についての再考
3. 学会等名 国際シンポジウム「ディアスポラとしてのプリヤート・モンゴル人」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ボルジギン・フスレ
2. 発表標題 溥儀のモンゴルとの政略結婚
3. 学会等名 国際シンポジウム「20世紀前半におけるモンゴルと日本」（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	田中 克彦  (TANAKA Katsuhiko)  (10014432)	一橋大学・大学院言語社会研究科・名誉教授    (12613)	